

THE 7 FRAMS FOR LIFE

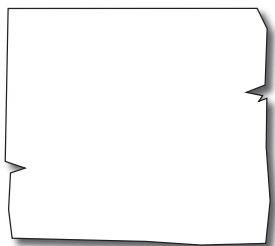
7つのワクワク枠

となりのコンパス①

第1フレーム

『アタマ』
〈Atama〉

『コトバ』
〈Cotoba〉



『カタチ』
〈Catachi〉

『カラダ』
〈Calada〉

木 岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

宝探しに でかけよう！

愛犬ランプベリー、おじいさん…とふれあう
少年期さんぽのフルーツフル成長物語

SAMPO FRUITS



となりのコンパス①

『カタチ コトバ カラダ アタマ』

プロローグ

0

「少年よ——」

「ん？」

「フレーム・フォー・ライフを知っておるじゃろうか？」

「——フレーム…」

「フレーム・フォー・ライフ—— フレー！ フレー！ フレーム、
あるいは、ワクワク^{わく}棒^{よう}とも呼ばれておる」

「ううん、知らないよ。 ——それは、いったい何^{なん}なの？」

「フレーム・フォー・ライフは、ライフのためになる棒^{わく}じゃ。

このライフには、人生^{じんせい}はもちろん、生活^{せいかつ}、生命^{せいめい}、いのち、生きるこ
と… も含^{ふく}まれる」

「そのライフって、だれのライフのこと？」

「みんなのライフじゃ。おまえさんやわしを含^{ふく}むみんなのライフ。

じゃから、このフレームは、少^{すく}なくとも、今^{いま}、地球^{ちきゅう}上^{じやう}のすべて
のライフのためになる」

「——」

「——このフレーム・フォー・ライフが具体的に何なのか、聞いてみたいと思わないかい？」

「——」

「少しは、聞いてみたいと思うじゃろう——」

「——。 ——。 ——」 . . .

「アッハッハッ！ そうか——」 おじいさんは、ゆっくりと立ち上がった。「——うむ。では、わしは、帰るとするかのだ。」

——じゃあ、達者でな」

おじいさんは、やわらかな笑みを浮かべながら、軽く手を振って、うなずくと、ゆっくり歩き始めた。

——ああ、行ってしまふ。

おじいさんの後ろ姿は、だんだん小さくなり—— ついに見えなくなった。

それまでのいきさつが、しばらく映画のように頭の中を流れた。

音楽——テーマ曲イン

♪美しき自然 Beautiful Nature

タイトル流れて。

1

その出会いは、とても不思議だった。

中学に入って初めての初夏—— そもそものきっかけは、“それ”
を海辺の砂浜で見つけたことだ。

——ん？ 何だろう？

キラリと輝く何かが砂浜の上に見えた。

近づいてみると、流れ着いたであろう1本のピンだった。

その中には、紙が折りたんで入っていた。

——手紙？

それをビンの中から取り出して広げてみると、そこには地元の
地図が描かれていた。よく見ると、岬の先端近くに○印があった。

——宝の地図？

一緒に連れて来ていた愛犬のランプベリーが、しっぽを勢いよく
振っていた——。

まもなく、それが“宝の地図”であると確信した僕は、決めたんだ。

うん。

ランプベリーの散歩もかねて——

宝探しに出かけよう！

音楽イン ♪夏 Summer 2 に続く

2

いそ きたい ぼく おお て と
急いで帰宅した僕は、大きなシャベルを手にとると、さっそく
ランプベリーと一緒に出発した。

もくひょう つ よ そうがい きゅう さか のぼ
目標ポイントにたどり着くためには、予想外に、急な坂を上らな
ければならなくて――

「ハア、ハア、ハア…」

さか のぼ お ぼく いき みだ
坂を上り終えたとき、僕の息は乱れきっていた。

――ぜんぼう み くだ こうばい さき かがや なに
――前方を見やると、下り勾配の先にキラリと輝く何かがあるこ
とに気づいた。

音楽フェード・アウト ♪夏 Summer

――お！？

ぜんしん ちから
全身に力がみなぎった。

さが もと たからもの
あれは、きっと、探し求めた宝物だ！

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky 途中から

つよ にぎ かお
シャベルを強く握りしめると、顔をほころばせながらランプベ
リーとともに勢いよく坂を駆け下りた。

よっしゃあ！

音楽 ♪ Soaring Up Into The Sky 3 に続く

3

そのキラリに^{ちか}近づくに^{すこ}つれ、少しずつスピードを^{ゆる}緩めた。

そばに^た立ち^ど止まってキラリを^み見たとき、^{じぶん}自分の^め目を^{うたが}疑った。

——え！？

なんと、そこには^{ひと}人が^{よこ}横たわっていたのだ。

な、なんで、こんなところに^{ひと}人が！？

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

^{ひ や}日焼けている^{み し}見ず知らずの^{あた}おじいさんが、^{あたま}頭を^{かわ}こちら^む側に向け
て^{よこ}横になっている——。

このとき、その^{かがや}輝きの^{しょうたい}正体に^{と まど}戸惑う^{い ぜん}以前に、^{ぎ もん}コワイ疑問が^{こころ}心に
^う浮かんだんだ。

^い生きているのか！？ それとも・・・

よく^{かんさつ}観察すると、^{なか}おじいさんのお腹が、^{じょう げ}ゆったりと^{じょう げ}上下している
のがわかった。

とっさに^{あたま}頭の中^{なか}で^{かんが}考えた。

——うん。“さわらぬ^{かみ}神に、たたなりなし”だ。

さっさと、この^ば場から^た立ち^さ去ろう。

——^い行くよ、ランプベリー。

ランプベリーの方^{ほう}へ^ふ振り^む向いた^{ぼく}僕は、^め目を^{おお}大きく^{み ひら}見開いた。

ギョ！？

ランプベリーが、^{あたま}おじいさんの頭をペロペロとなめていたのだ。

こらあ！ ダメだ！

心こころの中なかで叫さけびながら、ひもを引ひっぱった。ランプベリーも負まけじとばかりに、ふんばった。お互たがい譲ゆずり合あわずにいると——
ムクツと、そのおじいさんが動うごき始はじめたんだ。

！！！！ ——言こと葉ばにならなかった。

ドキドキドキ…

おじいさんは、ゆっくり上じょうはんしん半身おを起おこした。

かと思おもうと、口くちを開ひらいた。

「何なにしておる？」

ドキドキドキ…

「あ、ハイ。ぼ、僕ぼくは—— た、たか、た、退たい屈くつだったから？
——ラ、ランプベリーさんの散ぼ歩？」

ドキドキドキ…

このとき、なぜか“宝たからの地ち図ず”のことは、秘ひ密みつにした。

4

「ほう」 そう言いながら、おじいさんは、僕が持っていたシャベルに目をやった。

それを、さっと自分のお尻の後ろまで移動させた。

「ああ、これは、ヒマだったから——、ちょっくら穴でも掘ってやろうかなと、——思っおもて？」 もう、めちゃくちゃ——

「ほう、そうか」

「——」 . . .

海のはるか遠くをしばらく眺めていたおじいさんは、ふと、しゃべり始めた。

「おまえさん、『ルモウネのジュモン』を知っておるじやろうか？」

「え？ ——し、知らないよ」 まずい。このおじいさん、明らかにあやしすぎ。この場から、さっさと逃げなくては。

「——ん？ どうした？」

「ん？ いや、別に」

「では、さっそく行くぞ？」

「——」 ——え！？ もう来るの？

「ルモウネ、ルモウネ…」 おじいさんは、何やら唱え始めたんだ。

明らかにまずすぎる。

ああ、緊張しすぎている。

なんだか足が動かない。

高鳴る鼓動。

吹き出る汗。

いま いき と
今にも息が止まりそうな感じ。

ぜんしん きんにく かん
全身の筋肉がこわばる感じ。

...

「ルモウネ、ルモウネ… ああ、効^きいている」

「——」 ——もう効^きいている！？

「ああ、もうダメだ」

おじいさんの様^{よう}子^すをじっと見^みた。

「——」 ——え！？ 何^{なに}がもうダメなの？

おじいさんは、ゆっくり姿勢^{しせい}を変^かえ始^{はじ}め、——ん？

かんぜん よこ
完全に横^{よこ}になった。 ——んん！？

なんだなんだ？ 何^{なに}がどうして、どうなったんだ？

「じゃ、お休^{やす}み」

「へ？」

それから、おじいさんは、まぶたを閉^とじた。

み
見ると、ランプベリーも、すでにまぶたを閉^とじて眠^{ねむ}っていた。

ルモウネ、ルモウネ…ル、モウネル、モウネル、

——モウネル！？ もしかして、“もう寝^ねる”ってこと？

5

こんなことがあっていいのか！？

むちゃくちゃ、くだらなすぎるぞ。

あんなに、びびって損したぞ。・・・

モンモンとしながら、おじいさんとランプベリーから少し離れた
場所に腰を下ろした。

遠くに水平線が広がっているのが見えた。

青空と海の広がり色彩、あわいグラデーション——

水平線が描く、ゆるやかな弧——

はるかな海面上に点在し、うすい影を映す白い雲々——

汗ばんでいた肌を気持ちよく、なでる海からの涼しい潮風——

ああ、気持ちいいや。

——自然は、やっぱりすごいや。

心地よい呼吸を、心ゆくまで繰り返した。

再び地図を広げて見ると——

驚くべきことに、地図の上の○印は、おじいさんが昼寝している
場所とピッタリ一致していたんだ。

——なぜ！？

6

意を決して、おじいさんが昼寝している場所に再びアクセスし、話しかけてみた。

「——おじいちゃん？」

「——」 何の反応もなかった。

「——おじいちゃん、そろそろ起きていただけませんか？」

「——」 やはり、何の反応もなかった。

「——おじいちゃん！？」 声を大きくしてみた。

「——」 うんともすんとも言わないおじいさん。見ると、お腹の上下運動が、はっきり認められないことに気づいた。

「おじいちゃん！？」 思わず駆け寄ると、おじいさんの体を揺り動かした。

「——。——あ？」 おじいさんは、ゆっくり目を開けた。

「ふうー。驚かさないでくれよ」と僕。

「——ん？ なんじゃ？」

「あれ、す、すみませんが—— そこを、ど、移動していただけないでしょうか？ ——お願いします」 思わず両手を合わせた。

「あっ？ ——イヤじゃ」 あっさり断るおじいさん。

「な——」

7

どれくらいの時間^{じかん}が経^たったのだろう？

もうどうしようもないとあきらめかけた頃^{ころ}、おじいさんは、ふと身^みをおこし始め^{はじ}め、そのままゆっくりと立ち上^ちがった。

——ん！？ おも^{おも}わず身^み構^{がま}える僕^{ぼく}。

しかし、そんな僕^{ぼく}を気^きにも留^とめずに——

「ああ、よく寝^ねた。腹^{はら}も、ほどよく減^へっているし。アッハッハッ！」

おじいさんは、そのまま歩^{ある}き去^さった。

8

ともかくにも、それから、穴^{あな}掘^ほりに燃^もえたんだ。

音楽イン ♪ Reconstruction

でも、たとえ穴^{あな}が僕^{ぼく}の体^{からだ}をまるまる隠^{かく}すくらいにまでなったとしても、宝物^{たからもの}が見^みつかる気配^{けはい}は全^{まった}くなかった。

目覚^{めざめ}めたランプベリーは、ただ、身^みをかがめて穴^{あな}をのぞき込^こんでいるだけだった。

「おい、少年^{しょうねん}よ～。夕陽^{ゆうひ}に染^そまる景色^{けしき}がきれいじゃぞお～」

少し^{すこ}離れた場所^{はな}から、おじいさんの声^{こえ}が聞^きこえてきた。

「——」 相^{あい}手^てにせず、ガシガシとシャベルを動^{うご}かし続^{つづ}ける僕^{ぼく}。

「よかったら、こっち来て—— 一緒に、摘みたての、いちごでも
食わんかあ〜？」

「——」 なんで、よりによって——。 女子じゃあるまいし。
グウー … お腹が鳴った。
・・・ ——なんの、なんの！

そのまま掘り続けた。

「もう、そのへんでやめんと、地上に戻れなくなるぞお〜」
「——」 ——んなわけないじゃん。

掘り続けた。

でも、そのあとも、何の成果も生まれなかった。
「——」 ああ、なんだか、むなしくなってきたかも——。
・・・ ——なんの、なんの！

掘り続けた。

「——」 お腹減りすぎて、力が入らなくなってきたかも——。
・・・ ——なんの、なんの！

掘り続けた。

「その調子で掘っていても—— 宝物は見つからんのじゃなかろう
かあ〜？」

「——」 シャベルの動きをピタッと止めた。

9

ゆう ひ うみ かがや
夕陽が海をキラキラと輝かせていた。

こし お もくもく いきお
腰を下ろしながら、黙々と、勢いよく、いちごをほおばっている
ぼく わ ふ きよう た
僕と、分けてもらったいちごを、シッポを振りながら器用に食べて
いるランプベリ——。

「——」 うめえ～！

「——そんなに、宝物が欲しかったんか？」とおじいさん。

くち なか あじ の
口の中いっぱいの一ちごを味わいつくして、ほとんどすべてを飲
み込んだ僕は、ようやく口を開いた。

「このいちご、すっげえ、うまいよ。

こんなにおいしい、いちご、生まれて初めてかも。

——ああ、生き返る～！」 そう言って、さらにいちごをほおば
る僕。

「——。そうか—— 宝物を、そんなに——」

「——というか、どうして宝物のことを知っていたの？」 口の中の
いちごを味わいながら、僕は尋ねた。

「——知らなかった。当てずっぽうで言ってみたまでじゃった」

・・・ 「——でも、“その調子じゃ宝物が見つからない” って」

「——ん？」

「じゃあ、どんな調子だったら——」

「——はて、どんな調子だったら見つかるんじゃないかのお」

それから、やっと、“宝の地図”のことを、おじいさんに打ち明
けようと決めたんだ。

10

「これが、その宝の地図だよ」 僕は、それをおじいさんに見せた。

「お!？」 おじいさんは、そのとき明らかに驚きの声を上げた。

「——」

「——おまえさん、これ、どうしたんじゃ？」

「拾ったんだよ。砂浜で。ビンの中に折りたたんで入っていて——」

「ほう、そうか——」

おじいさんは、そう言いながら地図を受け取ると—— 何も話さず、しばらく地図をじっと眺めた。

そうして、おじいさんは、僕に地図を返すと、おもむろに口を開いたんだっけ——。

「少年よ——」

「ん？」

「フレーム・フォー・ライフを知っておるじゃろうか？」

「——フレーム……」

「フレーム・フォー・ライフ—— フレー! フレー! フレーム、あるいは、ワクワク枠とも呼ばれておる」

「ううん、知らないよ。 ——それは、いったい何なの？」

「フレーム・フォー・ライフは、ライフのためになる枠じゃ。」

このライフには、人生はもちろん、生活、生命、いのち、生きること… も含まれる」

「そのライフって、だれのライフのこと？」

「みんなのライフじゃ。おまえさんやわしを含むみんなのライフ。」

じゃから、このフレームは、^{すく}少なくとも、^{いま}今、^{ち きゅうじょう}地球上のすべての
のライフのためになる」

「——」

「——このフレーム・フォー・ライフが^{ぐ たいてき なん}具体的に何なのか、^き聞いて
みたいと思^{おも}わないかい？」

・・・

——^{けつきよく}結局、^{ぼく}僕は、^{はし}おじいさんを^お走って追いかけることにした。

^{あゆ}歩みを^と止めて、^む向きを^か変えるおじいさんに、^{ぼく}僕は^い言った。

「——あの、やっぱり、^き聞いてみたいです。 ハア、ハア…」

「——ん？ なぜ？」

「——。 ——な、^{なん}何となく？。 ハア、ハア…」

「——うむ、よかろう。 ——では、もう^{いちど}一度、その^{ちず}地図を^か貸して
くれるかい？」

「あ、ハイ」 ^{ぼく}僕は、^{いき}息を^{とと}整えながら^{ちず}地図を^さ差し^だ出した。

おじいさんは、^う受け取った^と地図を^{うらがえ}ゆっくりと裏返した。

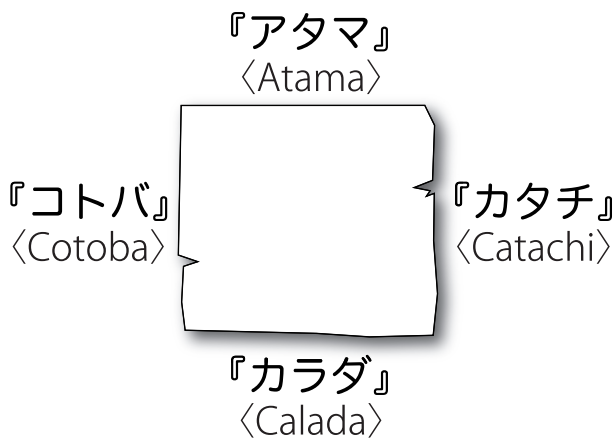
^{うら}裏は、^{なに}何も^か書かれていない^{はくし}白紙だった。

「では、^い行くぞ？」

「え？ ——さ、さあ^こ来い」

音楽イン ♪心地よき日々 Comfortable Days11 に続く

第1フレーム



11

「『カタチ コトバ カラダ アタマ』

じゃ」^{うら はくし うえ どうじ}裏の白紙^{ほうこう}の上で、同時に、4つ^{じゅん ゆび}の方向を順に指さすおじいさん。

「——」

「ふつうの地図^{ちず}の枠^{わく}の場合^{ばあい}には、4つ^{ほうこう}の方向に『東^{とう} 西^{さい} 南^{なん} 北^{ほく}』^くが来るじゃろ？」^{おもて}表^{おもて}にした地図^{ちず}の上で、同時に、4つ^{ほうこう}の方向を順に指さすおじいさん。

「うん」

「すると、このフレーム・フォー・ライフ^{ぼあいい}の場合^{ばあい}には、4つ^{ほうこう}の方向に『カタチ コトバ カラダ アタマ』^くが来るんじゃ」^{ふたた}再び、地^ち図^ずを裏返^{うらがえ}した白紙^{はくし}の上で、同時に、4つ^{ほうこう}の方向を順に指さすおじいさん。

「——ん？」

「『カタチ コトバ カラダ アタマ』、

『カタチ コトバ カラダ アタマ』、

カ、コ、カ、ア、カ、コ、カ、ア——

カッコー、カアー♪ カッコー、カアー♪ ^な鳴^ないてる～♪

じゃな。アッハッハッ！」

「——」 . . .

「まずは—— “ライフ^{ほうこう}の方向”だとおも^{おも}ってみてごらん」

「ホウコウ？」

『アタマ』
〈Head〉

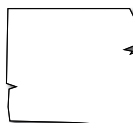


『コトバ』
〈Words〉

『カタチ』
〈Shapes〉

『カラダ』
〈Body〉

『北』



『西』

『東』

『南』

「そうじゃとも。“方^{ほう}針^{しん}、方^{ほう}角^{かく}、方^{ほう}位^い、向^むき…”という意味^{いみ}の“方^{ほう}向^{こう}”。

つまり、“ライフのあり方^{かた}”じゃな」

「ライフのあり方^{かた}——」

「そうじゃ。じゃから、例^{たと}えば、今^{いま}、自^じ分^{ぶん}が、ど^{ほう}の方^{こう}向^むにい^いるの^か、
ど^{ほう}の方^{こう}向^むに向^むかおうと^いているの^か… などの、さ^さま^まざ^まな“ライフ
のあり方^{かた}”を、ライフのた^ための^{わく}枠、フ^フレ^レーム・フ^フォ^ォー・ラ^ライ^イフは、
お^おし^し教^きえて^えく^くれる^るん^んじ^じゃ」

「——」

さ^さま^まざ^まな“ライフのあり方^{かた}”を

ラ^ライ^イフのた^ための^{わく}枠

フ^フレ^レーム・フ^フォ^ォー・ラ^ライ^イフは

お^おし^し教^きえて^えく^くれる^る

12

「まずは、この『カタチ コトバ カラダ アタマ』の枠を利用して、さまざまな地図を作ってみれば、その意味がわかりやすくなるじゃろう」とおじいさん。

「地図？」聞き返す僕。

「そうじゃとも。」

ふつうの『東 西 南 北』の枠を利用すれば、例えば、砂浜、公園、お店、学校、家…などのお互いの方向関係がわかる。それをもとに、それぞれを『東 西 南 北』の枠の上に配置すれば、地図が完成する。

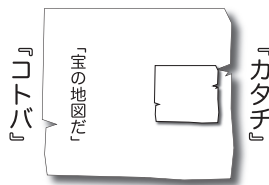
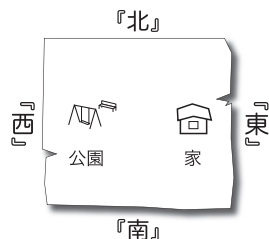
まあ、極端な話、例えば、西に公園、東に家を配置するだけでも、1枚の地図が完成する」

「——」

「一方、この『カタチ コトバ カラダ アタマ』の枠を利用すれば、いろーんなライフどうしのお互いの方向関係がわかる。それをもとに、それぞれのライフを『カタチ コトバ カラダ アタマ』の枠の上に配置すれば、やはり地図が完成するんじゃ」

「——。——ん？」

「例えば、これを見て『宝の地図だ』と言葉にする人生が、こっちの『コトバ』の方向にあるとすれば、これを見るままの人生は、こっちの『カタチ』の方向に



(言葉にする) (見るまま)

ある—— そんな地図^{ちず かんせい}を完成させることができる」

「——」 . . .

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 13 に続く

13

「地図^{ちず}と言っても、これは、ちょっとした“プチ・マップ”じゃがの」

「プチ・マップ——」

「プチといえども、やっぱり地図^{ちず}は便利^{べんり}じゃ。

なぜなら、いったん地図^{ちず かんせい}が完成してしまえば、“今、自分^{いま じぶん}は、どの方向^{ほうこう}にいるのか、どの方向^{ほうこう}に向かおうとしているのか”が一目瞭然^{いちもくりょうぜん}となるのじゃからのお。

——まあ、それはふつうの地図^{ちず}の場合^{ばあい}と同じ^{おな}じゃな」

「——」

「もちろん、もし、道路^{どうろ}の案内^{あんない}標識^{ひょうしき}や看板^{かんばん}などの目印^{めじるし}が充実^{じゅうじつ}しておったり、その土地^{とち}に住^すんでいる方が近く^{かた ちか}におられたりすれば、たとえ地図^{ちず}がなくとも、道^{みち}に迷^{まよ}わずに目的地^{もくてき}にたどり着^つけるじゃろう。じゃがのお、実際^{じっさい}には、そういった目印^{めじるし}や道先案内人^{みちさきあんないにん}に出会^でえないような場面^{ばめん}も多々^{た た}ありうる」

「そんなときは、地図^{ちず}が役立^{やくだ}つんだね」

「そうじゃとも。

しかも、実際^{じっさい}には、未だ^{いま}地図^{ちず}のない前人未踏^{ぜんじん みとう}の地^ちを進むべき場面^{すす ばめん}や、新しい領域^{あたらしいき}を開拓^{かいたく}すべき場面^{ばめん}、あるいは、未だ^{まだ}誰も経験^{だれ けいけん}してい

ないような未来^{みらい}を切り開くべき場面^{き ほん}もあるかもしれん。そのような
未知^{みち}の場面^{ほん}では、地図^{ちず}を限りなく新しく作れる、フレームやコンパ
スがおおやくだ役に立つじやろう」

「——コンパス？」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 14 に続く

14

「『東^{とう} 西^{さい} 南^{なん} 北^{ぼく}』の枠^{わく}がコンパスを提供^{ていきょう}できるように、『カタチ
コトバ カラダ アタマ』の枠^{わく}もコンパスを提供^{ていきょう}できるんじや。
フレーム・フォー・ライフから生^うまれたコンパスじやから、コンパ
ス・フォー・ライフじやな」とおじいさん。

「コンパス・フォー・ライフ——」

「このコンパス・フォー・ライフからでも、フレーム・フォー・ラ
イフからでも、ライフのあらゆる状況^{じょうきょう}にあ^あわせて、さまざまなプ
チ・マップ^{つく}を作ることができるじやろう。

——まあ、いずれからにせよ、こうして完成^{かんせい}したプチ・マップた
ちは、ライフ^{ぶん きてん}の分岐点になる」

「ライフ^{ぶん きてん}の分岐点——」

「むろん、『東^{とう} 西^{さい} 南^{なん} 北^{ぼく}』のコンパスの針^{はり}が指^さし示^{しめ}す方向^{ほうこう}が進^{すす}
むべき方向^{ほうこう}であるとは限らないように—— コンパス・フォー・ラ
イフの針^{はり}が指^さし示^{しめ}す方向^{ほうこう}が進^{すす}むべき方向^{ほうこう}であるとは限らない」

「——え？ じゃあ、何^{なに}が進^{すす}むべき方向^{ほうこう}を教^{おし}えてくれるの？」

「“ライフそのもの”が^{おし}教えてくれるのじゃ。どこに^む向かうべきか、
どの方向に^{ほうこう}進む^{すす}のがよいかを^{おし}教えてくれるのは、“ライフそのもの”
にほかならない」

「^{おし}教えてくれるのは、ライフそのもの——」

どこに^む向かうべきか

どの方向に^{ほうこう}進む^{すす}のがよいか

^{おし}を教えてくれるのは

“ライフそのもの”

15

「さらには、このように“完成したプチ・マップをどのように活用するか”だけでなく、“どの完成したプチ・マップを選ぶのか”を教えてくれるのも、やっぱりライフそのものじゃ」

「——え？」

「例えば、“おもしろい-つまらない”のプチ・マップを持っている人生と“安心-不安”のプチ・マップを持っている人生——

例えば、“ために生きている-おかげで生きている”のプチ・マップを持っている人生と“勝つ-負ける”のプチ・マップを持っている人生——

例えば、“愛している-憎んでいる”のプチ・マップを持っている人生と“好かれる-嫌われる”のプチ・マップを持っている人生——

例えば、“行動する-考える”のプチ・マップを持っている人生と“いい方に考える-悪い方に考える”のプチ・マップを持っている人生—— … それぞれのライフが大切にしているもの、目指しているものが根本的に違っているように感じないかい？」

「——そうだね。確かに、そう感じるよ」

「うむ。このように“どのプチ・マップを持っているか”は、その人の価値観や目標を大いに反映しておる。このことは、まさに“どのプチ・マップを選ぶのか”を教えてくれのも、ライフそのものであることを意味しておる」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 16 に続く

どのプチ・マップを^{えら}選ぶのか
 を^{おし}教えてくれるのも
 “ライフそのもの”

16

「とりわけ、人生の^{じんせい めいろ}迷路に、はまってしまった^{ばめん}場面、人生の^{じんせい もくひょう}目標を
^{さいかくにん}再確認したり^{さいせつてい}再設定したりしたい^{ばめん}場面では、どんなプチ・マップが
 ふさわしいのか、どのフレームが^{ゆうこう}有効なのかを^{かくにん}確認することが^{おお}大い
 に^{やくだ}役立つじやろう」

「——え？ フレームは、1つだけじゃないの？」

「1つだけではない。

『カタチ コトバ カラダ アタマ』は、^{だい}第1フレームじや。

フレーム・フォー・ライフは、^{だい}第1フレームから^{だい}第7フレームまで、^{ぜんぶ}全部で7つあるんじゃない」

「ええ！？ 7つも！？」

「アッハッハッ！ ^{しょうねん}少年よ。 たった7つ！？ そう^{おも}思^{じんせい}う人生もありじゃよ。なぜなら—— おっと、それは、おまえさんに^{まか}任せよう」

「——」 音楽フェード・アウト ♪心地よき日々 Comfortable Days

「じゃが、これだけは、はっきり^い言^いっておこう。

これは、ただの^{わく}枠^{わく}ではない。枠^{わく}フォー・ライフじゃ」

「——だから？」

「^{わく}枠と7回^{かい}繰^{かえ}り返して^い言^いってみてごらん」

「——わくわくわくわくわくわくわく」

「あそれ♪ ワクワクワク、ワクワクワク、ワクワクワクワク
ワクワク♪ あそれ♪ ワクワクワク、ワクワクワク、ワクワク
ワクワクワクワク♪」 おじいさんは、^{さんさんなびょうし}三三七拍子のリズムで
^{うた}唱^{うた}った。「ワクワクしてくるじゃろ？」

「——」 . . .

「これは決^{きゅう}して窮^{きゅう}屈^{くつ}な^{わく}枠^{わく}ではない。ましてやクヨクヨ^{わく}枠^{わく}でもない。

^{しや}視野^{かのうせい}や可能性^{ひろ}を広げてくれるワクワク^{わく}枠^{わく}じゃ」

「ワクワク^{わく}枠^{わく}——」

「そうじゃ。しかも、このワクワク^{わく}枠^{わく}は、フレー！ フレー！
フレームでもある」

「——」 . . .

「このフレー！ フレー！ フレーでもあるワクワク^{わく}枠^{わく}が7つあるんじゃない」

「——じゃさあ、第2のワクワク枠は何なの？」

「うん。はやる気持ち^{きもち}は、わからんでもない。

じゃが、その前^{まえ}に、まずは、この第1フレームとじっくり付き合^あってみてごらん。それだけでも十分に楽しめるはずじゃ。

第2フレームについては、来年^{らいねん}、話^{はな}そう」

「来年^{らいねん}？」

「そうじゃ、来年^{らいねん}じゃ。この初夏^{しよか}の季節^{きせつ}はな、この岬全体^{みさきぜんたい}が1年^{ねん}で最も^{もっと}美しくなる季節^{きせつ}なんじゃ。その季節^{きせつ}に再び^{ふたたび}会^あうってのも、なかなか^{おつ}乙なもんじゃろ？ アッハッハッ！」

17

その晩^{ばん}、僕^{ぼく}は、ベッドの上^{うへ}で横^{よこ}になって、ぼんやりと天井^{てんじょう}を眺^{なが}めながら、その日^ひのことを思い返^{おも}していた。

あれを見て“宝^みの地図^{ちず}だ”と思う^{おも}のが、ライフのあり方^{かた}の1つ？

・・・ ——うーん、だから、何^{なん}なのだろう？

ああ、宝探^{たからさがし}しをやってみたかったなあ。ガッカリだよ。

——ワクワク枠^{わく}？ ——フレ！ フレ！ フレーム？

——フレーム・フォー・ライフ？

——コンパス・フォー・ライフ？

いったい何^{なん}なんだろう？

なんかへんだし—— それに7つもあるっていうし——

・・・

——アレ？ 何^{なん}だったっけ？ 第^{だい}1 フレームって——

・・・ ——^{わす}れた？

どうでもよかったけれど、少しもったいないような^き気がしたので、ゆっくり^{おも}思い返^{かえ}してみることにした。

・・・

——あっ！ カッコー、カアー♪ カッコー、カアー♪

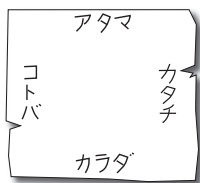
^な鳴^ないてる～♪ だ！

カコ、カコ、カコ… 『カタチ』と—— 『コトバ』？

カア、カア、カア… 『カラダ』と—— 『アタマ』？

まあ、一^{いち}応^{おう}、^{わす}忘^{わす}れないように^か書^とき留^とめておこうか——。

ベ^おッ^あド^{ぼく}から^お起^あき上^あが^あった^{ぼく}僕^{ぼく}は、机^{つくえ}の上^{うえ}で、4^{ほうこう}つの^ち方^ず向^{うら}を^{うら}地^{うら}図^{うら}の裏^{うら}に^{えんぴつ}鉛^{えんぴつ}筆^{えんぴつ}で^か書^こき込^こんだ。



て^て手^もに持^もった^もそれ^もを、しばらく、^{なが}眺^{なが}めた。

おじいちゃん^{あた}の^み頭^みを見^みる^み人^{じん}生^{せい}、体^{からだ}を見^みる^み人^{じん}生^{せい}、それぞれが『アタマ』と『カラダ』の^{ほうこう}方^{ほうこう}向^{こう}にある^{ほうこう}って^{ほうこう}こ^{ほうこう}と？ ・・・

——うーん。やっぱりヘンだよ。「これは^{なん}いったい何^{なん}なんだい？」

「フ^うレーム・フ^うォー・ラ^うイフから^う生^うまれた、コンパス・フ^うォー・ラ^うイフで^うご^うざ^うい^うま^うす^うう～♪」

「ワッー！！！」

僕は、とっさに地図を放り投げ、そのままベッドの上に飛び乗った。ひらひらと床に舞い降りる地図。

「か、か、紙から、——声が出た!？」

18

しばらくベッドの上にいたけれど、何にも聞こえず——

手に持ったときにだけ、話せるってこと？

僕は、再び地図を手に持ってみた。

「コンバンハでございますう〜♪」 その声は、とてもおおらかで、朗らかで—— 若い紳士のようにもあった。

「こ、こ、こんばんは」 ——!!!

コンパスの針の絵が、浮かび上がってクルクル回っているのがわかった。

「——」 ——夢だ! これは、ゼツタイ夢にちがいない!

「——」 夢ではないでございますう〜♪

「ワッー!!!」・・・「——わ、わかるの!? 心の中で話すことも」

「わかるでございますう〜♪」

「——」 ——本当かよお?

「——」 本当でございますう〜♪

「——」 !!!

急いで地図を机の上に置いた。すると、コンパスの針の絵のクルクルは、しだいに遅くなり—— ゆっくり止まった。

声に出して話せるだけでなく、心の中でも話せるってこと？

19

結局、いろいろ話を聞けるかもしれないと思った僕は、再度、ペーパー・コンパスを手にとってみた。

「ほーい♪ 何か御用でございましょうか〜？♪」 回転しているコンパスの針の絵——。

「僕の名前は、さんぽです」

「君の名前は、何ですか？」

「わたくしの名前は、コンパスでございますう〜♪」

「——」・・・「コ、コンパス、あ、あの、その、教えてほしいんだ。岬で出会った、おじいちゃんの正体は？」

「デアッタ？——」

「ほら、いたじゃん。岬のあの場所に、ほら、ほれ、あれ、頭、輝いていた——」

「イタジャン？ カガヤイテイタ？

——わからないでございますう〜♪」

「——え？」・・・「——じゃさあ、この『カタチ コトバ カラダ アタマ』の枠を利用したプチ・マップの作り方は？ どんな作り方があるんだい？」

「プチ・マップの作り^{つく}方^{かた}は、フレーム・オーナーのお好み^{この}でござい
ますう〜♪

「フレーム・オーナー？」

「フレーム^き記入^{にゅうしや}者、および、フレーム・ホルダーのことでございま
すう〜♪」

「——そ、そうなんだ」・・・「——ふわあああ〜」

なぜだか、^{おお}大きな^であくびが出た。

それから^{ぼく}僕は、^{まくらもと}枕元にペーパー・コンパスを^お置きながら、^{ふた}再び、
ベッドに^{よこ}横になった。

20

^め目を^さ覚ますと、^{そと}外は、もうすでに^{あか}明るくなっていた。

もう^{あさ}朝かあ——。

ベッドで^{じょうはんしん}上半身を^お起こした僕は、^{ぼく}何かの^{なに}気配^{けはい}を感じた。

^{ほうこう}その方向^みを見ると——

「ええ!？」

そこには、^{ゆか}床から^{すうじつ}数十センチの^{くうちゅう}空中にフワフワと^う浮かんでいる
ペーパー・コンパス、いや、コンパスの^{すがた}姿があった。

それも、^{ぼく}僕の^{からだ}体より一回りほど^{ひとまわ}大きくなって——。

「おはようございますですう〜♪」コンパスの^{ほが}朗らかなあいさつ。

「お、おはよう」^め目を^めぱちくりしながらあいさつを返した。

^{ぼく}僕が^{ゆか}床の上に^{うえ}降り立^おつと、コンパスは^{いちぶ}一部を^{かたむ}傾け、チョイチョ

イと床をノックした。

・・・ ―え？

戸惑っていると、コンパスは、再び床をノックしながら言った。

「よろしければ、どうぞでございますう〜♪」

「―えっ？ 乗ってみてもいいの？」

「そうでございますともお〜♪」

コンパスの上に、おそろおそろ四つんばいになってみた。

コンパスの厚みが増しているおかげで、破ける心配もなさそうだった。それから、コンパスの上はじを軽くつかんでみると――

「しっかり、つかまっているのでございますう〜♪」 コンパスは、そう言うやいなや、僕を乗せたまま、2階の窓から、ふわっと外へ飛び出て行ったんだ。

「ウ〜ワッ！！」

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky 21 に続く

21

家々が下を流れている――。

「す、すごいよ！ 空を飛べるなんて！」

「ありがとうございますですう〜♪」 そう返事したコンパスは、今度は、空高く舞い上がり始めた。上へ、上へ―― 家々や道路や森や川が、見る見る遠ざかっているのがわかった。

しばらくすると、スピードが緩み、静止した。

そこは、地元^{じもと}全体^{ぜんたい}をゆうに一^{いち}望^{ぼう}できるほどの上空^{じょうくう}だった。

その海岸^{かいがん}線^{せん}の形^{かたち}は、地図^{ちず}で見^みていたのとほとんど同じ^{おな}だった。

前方^{ぜんぽう}を見^みやると—— これまで見^みたのとは比較^{ひかく}にならないほど、
はっきり丸^{まる}みを帯^おびている水平^{すいへい}線^{せん}が目^めに入^{はい}った。太陽^{たいよう}の光^{ひかり}があたっ
ている海面^{かいめん}は、表現^{ひょうげん}できない美^{うつく}しきでキラキラ輝^{かがや}いていて——。

「行^いってみたい場所^{ばしょ}は、ございませんでしょうか〜？ ♪」

「え？ そうだなあ——。 ——とりあえず、あの岬^{みさき}？」

「はい、かしこまりましたでございますう〜♪」 コンパースは、
そう言う^いと、スムーズ^{かつくう}な滑空^{はじ}を始^はめた。

心地^{こころ}よい風^{かぜ}が全身^{ぜんしん}をなでている——。

「ああ、気持ち^{きもち}いいや！」

岬^{みさき}へと向^むかうあの上^{のぼ}り坂^{ざか}の上^{じょうくう}空^{ゆうゆう}を悠々^とと飛^とび越^こえ——

「ヤッホー！ ラクチン、ラクチン！」

例^{れい}の下^{くだ}り勾配^{こうばい}にさしかかる頃^{ころ}、そのポイント^みを見^みやると、キラリ
が目^めに入^{はい}った。

「あっ、おじいちゃんだ！ また、あそこで寝^ねてらあ。これじゃ、
朝寝^{あさね}だよ。

——お〜い！！」 お腹^{なか}の底^{そこ}から声^{こえ}を張^はり上^あげてみた。

そうして、コンパースがそのキラリ^{じょうくう}の上^つ空^{くう}にたどり着^つこうとする、
まさ^{しゅんかん}にその瞬間^{ぼく}、僕^めの目^めは大大^{おお}きく見開^{みひら}いた。

「え！？」

そのキラリ^{しょうたい}の正体^{あさ}は、朝^{ようこう}の陽光^{はんしや}が反^か射^{がや}して輝^{かがや}く——

——宝箱^{たからばこ}！？

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

22

しかし、コンパスは、そのままスーッと素^す通^どりした。

「わあ！ ストップ！ ストップ！」

コンパスは、何^{なん}の反^{はん}応^{のう}も返^{かえ}さず、海^{うみ}の上^{じょう}空^{くう}を進^{すす}み続^{つづ}けた。

「宝^{たから}だ！ タ、カ、ラ！ あそこ^{たからばこ}に、でっかな宝^{たから}箱^{ばこ}があ^あったぞ！」

それでも、コンパスは、そのままグングン進^{すす}み続^{つづ}け—— だ^だん^{だん}と海^{かい}面^{めん}スレ^すスレ^れにま^まで近^{ちか}づいた。

か^{おも}と思^{おも}うと、次^{つぎ}は、グイーンと急^{きゅう}上^{じょう}昇^{しょう}を始^{はじ}めた。

「うわあああ……！ ——どうしたんだあ！？ 大^{だい}丈^{じょう}夫^ぶかあ！？」

コンパスは、全^{まった}くお構^{かま}いな^なしだ^だった。それ^あか^いら^だし^だば^らく^くの^あい^だ間^{かん}、ジグザグしたり、クルクル回^{かい}転^{てん}したり—— コンパスは、上^{じょう}下^げ左^さ右^{ゆう}にメ^めチ^ちャ^やク^くチ^ちャ^やな方^{ほう}向^{こう}転^{てん}換^{かん}を繰^くり返^{かえ}した。

両^{りょう}手^てと両^{りょう}腕^{うで}がジ^じワ^わジ^じワ^わ疲^{つか}れてき^きて—— コンパスに^しが^がみ^みつ^つい^いて^てい^いる^るの^のが^がや^やつ^つと^とに^にな^なっ^って^てき^きた。

「まずい—— 力^{ちから}が^{はい}入^{はい}ん^んな^なく^くな^なっ^って^てき^きたよ」

そ^なの^にと^き何^{なに}や^やら^ら聞^きこ^こえ^え始^{はじ}め^めた^たん^んだ。よ^よく^く耳^{みみ}を^をす^すま^ます^すと——

「…ルモウネ、ルモウネ、ルモウネ…」

「だから、寝^ねな^なく^くて^てい^いい^いっ^って^てい^いう^うの^の！ こ^ねら^ら、寝^ねる^るな^なあ^あ！ 寝^ねる^るな^な！ 寝^ねる^るな^な！ …」

「…モウネル、モウネル…」

し^すば^いら^りく^{りょく}す^ふと^ふ、コンパスは、推^{すい}進^{しん}力^{りょく}と浮^ふ揚^{りょう}力^{りょく}の両^{りょう}方^{ほう}を^{かん}全^{ぜん}全^{ぜん}に^にう^うし^し、僕^{ぼく}と一^{いつ}緒^{しょ}に海^{うみ}へ^まと真^さっ^さ逆^{さか}さ^まに落^ら下^っし^し始^{はじ}め^めた。

「うわああああああああああ……！！」

——ゴトツ。

ベッドから^{ゆか}床へ、ずり^お落ちて^{め ぞめ}目覚めた。

しばし^{ぼうぜん}呆然——。

て ^{うで} つか ^{まった} かん
手と腕の疲れは、全く感じなかった。

ああ、^{ゆめ}夢でよかった——。

^{しんそこ} 心底、^{おも}そう思った。

^{ゆか}床にひざまずいたまま、すっかり^{あか}明るくなっている^{まど}窓の^{そと}外をしば
らくボーっと^{なが}眺めた。

^みふと^{ち ず}見ると、^{ゆか}地図も^{うえ}床の上に^{おち}落ちていることに^き気づいた。

・・・ ——あれ？

どこまでが^{げんじつ}現実？ どこからが^{ゆめ}夢？

23

地図の裏には、しっかり、『カタチ コトバ カラダ アタマ』
の文字が残っていた。

ってことは、少なくとも、あそこまでは現実だ。うん。

・・・ ——あっ！ 夢と現実って、プチ・マップの作り方と
関係がありそうじゃないか？

・・・ ——あっ！ もしかして——

新しいプチ・マップの作り方がひらめいた僕は、コンパスの存
在が夢か現実かハラハラしながら地図を手を持ち、話しかけてみた。

「おーい、わかる？」

「——あつ、ほいほうい〜♪」 コンパスの応答があった。

ああ、よかった。こっちも現実だ！ 「——おはよう！」

「オハヨウでございますう〜♪」

「あれ、わかったかもしれない。新しいプチ・マップの作り方」

「ほういー？ ♪」

「えっと、たとえば、眠っている間に夢を見る——想像の中で見たり
想像の中で聞いたりする、つまり、頭の中だけでとらえる人生が

『アタマ』の方向にあるとするだろ？」

「ほういー♪」

「すると、例えば、現実をとらえる——実際に目
で見たり実際に耳で聞いたり実際に手でふれたり
する、つまり、体を通じてとらえる人生が『カラ
ダ』の方向にあるんだよ」

「ほいほういー♪」

『アタマ』

夢を見る
(頭の中だけでとらえる)

現実をとらえる
(体を通じてとらえる)

『カラダ』

「それから、例えば、心の中で会話する——頭
 の中で会話する人生が『アタマ』の方向にある
 とすれば、声を出して会話する人生が『カラダ』
 の方向にあるよ」

『アタマ』
 頭の中で会話する
 (心の中で会話する)

声を出して会話する

「ほいほいほういー♪」

『カラダ』

「もちろん、頭の中だけでとらえることは、ほかにもあるよ。

例えば、アイデアがひらめくことだったり、想像上で考えを進め
 ることだったり、ある出来事を思い出すことだったり…。

どれも、頭の中に何かを思い浮かべることをベースにしているか
 ら、同じように『アタマ』の方向にあるんだよ」

「——ふわあああ〜♪」 コンパスが大きなあくびをした。

「——大丈夫？」

「ダイジョウブでございますう〜♪ なんだか、とても眠たくてし
 かたないでございますう〜♪」

「あ、ごめんごめん。そうだったんだね。では、のちほどゆっくり。
 ——お休み」

「ふわあああ〜♪ オヤスミでございますう〜♪」

24

コンパスを机の上に置いた僕は、そのままイスに座り、窓の外
 を眺めた。

「ふわあああ〜」 なんだか、こっちまで眠たくなってきたよ——。

・・・ ——ん？ あ、そうだ！

コンパスの^{き も}気持ちを、こちらの^{からだ}体をふるわせ
てキャッチする、^{かんじょう い にゅう}感情移入の^{じんせい}人生が『カラダ』の
^{ほうこう}方向にあるとすれば—— コンパスの^{き も}気持ちを
^{あたま}頭の中で^{おも えが}思い描く、^{そうぞう}想像の^{じんせい}人生は、^{そうたいてき}相対的に『ア
タマ』の^{ほうこう}方向にあるんじゃないか？

『アタマ』

想像

感情移入

『カラダ』

その^き気づきは、^{ねむ け ふ と}眠気を吹き飛ばし、^{あたら}新しい^{つく かた}プチ・マップの^{つみ}作り方を
次々と^{つぎつぎ}見つけさせてくれた。

『アタマ』

^{おも}思いやり
^{し こう}思考
(^{あたま}頭で) ^{かんが}考える
^{こころ}心に^{おも}思い^{うか}浮かべる
イメージ・トレーニング
^{あたま}頭の中を^{なか}動かす
^{かんが}考えを進める

^{きょうかん}共感
^{かんじょう}感情
(^{からだ}体で) ^{かん}感じる
^{こころ}心で^{かん と}感じ取る
(^{からだ}体を使う) トレーニング
^{からだ}体を^{うご}動かす
^{こうどう}行動する

『カラダ』

・・・

^{こころ}心は、『アタマ』と『カラダ』の^{りょうほうこう}両方向と^{かんれん}関連しているだろう。

^{こころ}心は、^{ひろ い み も}広い意味を持つのだろう。

『アタマ』

心に思い浮かべる

心

心で感じ取る

『カラダ』

25

そして、思いのほか、プチ・マップ作り^{づく}に惹かれるようになったんだ。

夏休み^{なつやす}—— とある昼下がり^{ひるさ}にランプベリーとコンパスと一緒^{いっしょ}に海辺^{うみべ}に来ていたときには、『カタチ コトバ』の方向^{ほうこう}のプチ・マップ作り^{づく}について思いめぐらせていた。

砂浜^{すなはま}に腰^{こし}を下ろしながら——。

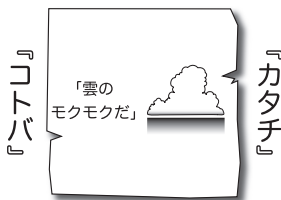
ランプベリーは砂浜^{すなはま}を自由^{じゆう}に駆け回^{かまわ}っていた。

ザブーン、ザザザザシュー …

心地^{こち}よい波^{なみ}の音^{おと}が響^{ひび}き渡^{わた}っていた。

水平線^{すいへいせん}の上^{うえ}には、白い雲^{しろくも}がモコモコしているのが見^みえた。

「そうすると、例えば、アレを見るまま^みの人生^{じんせい}が『カタチ』の方向^{ほうこう}にあるとすれば、『雲^{くも}のモクモクだ』と言葉^{ことば}にする人生^{じんせい}は『コトバ』の方向^{ほうこう}にあるってことかあ——」

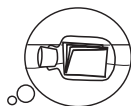


(言葉にする) (見るまま)

「ほうい〜♪」

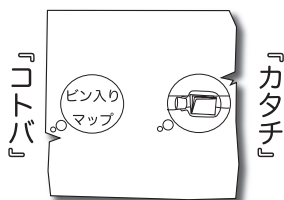
「そう言^いえば—— ちょうど、あの辺^{あた}りで君^{きみ}のことを初^{はじ}めて見^みつけただんだけ」

あのときの様子^{ようす}を頭^{あたま}の中^{なか}に思い浮^{おも}かべてみた。



——あっ、そうだ！

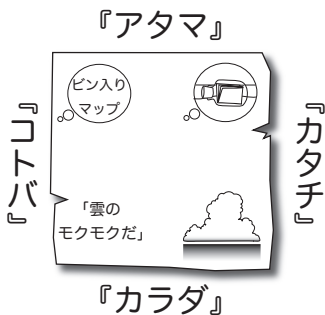
例えば、^{たと}頭^{あたま}の中^{なか}のイメージ^みを見る^{みんせい}ままの人生^{じんせい}が『カタチ』の方向^{ほうこう}にあるとすれば—— “ピン入^いりマップ” とかと頭^{あたま}の中^{なか}で言葉^{ことば}にする人生^{じんせい}は『コトバ』の方向^{ほうこう}にあるってことも成り立つよ。



(言葉にする) (見るまま)

——ほいほうい〜♪

「うん。そうすると—— これらは、1つの地図^{ちず}にまとめることができるよ」



「ほいほういほうい〜♪」

26

「でもさあ、“だから何？”って感じだよな」と僕。

「ダカラ—— 何でございましょう～？ ♪」

「そうさ」

ちょうどそのとき、ランプベリーが駆け寄り、じゃれついてきた。
ランプベリーの首から胸の辺りをさすってあげた。すると、ランプ
ベリーは仰向けになり—— 気持ちよさそうに、じっとしていた。

ランプベリーのぬくもりが手に伝わるのを感じた。

「アハッ。例えば、こんなふうに手でふれて感じるままの人生が
『カタチ』の方向にあるとすれば、“ランプベリーのぬくもり”と
言葉にする人生が『コトバ』の方向にあるってことも言えるよね」



(言葉にする) (感じるまま)

「ランプベリーというお名前なのですね～ ♪」

「そうだよ」——ふと空を見ると、シュークリームの形にそっくりな雲が浮かんでいた。

「ああ、あれは、完璧にシュークリームだね。ああ、うまそう」

グウー… お腹が鳴った。——ああ、お腹空いた。・・・

「——あつ、そうだ！ ひらめいた！」

「ほうい？ ♪」

「この『カタチ』の方向にある人生は、何かを見るまま、何かにふれるままの人生だけに限らないと思うんだ。だから、例えば、“おなかすいた”と言葉にする前の、体の中のこの感じをただ感じるままの人生も『カタチ』の方向にあっていいんだよ。きつと——」



(言葉にする) (感じるまま)

「ほーうほうほう〜♪」

「そういう意味で、“おいしい、眠い、気持ちいい、心地よい波の音、座っている、ぬくもり、白い雲が浮かんでいる、お腹空いた…”は、どれも同じなのさ。これらはすべて、言葉にするライフとして『コトバ』の方向に置いて、言葉にする前のさまざまな感じをただ感じるままのライフが『カタチ』の方向に置けるのと対になっているのさ。きつと——。



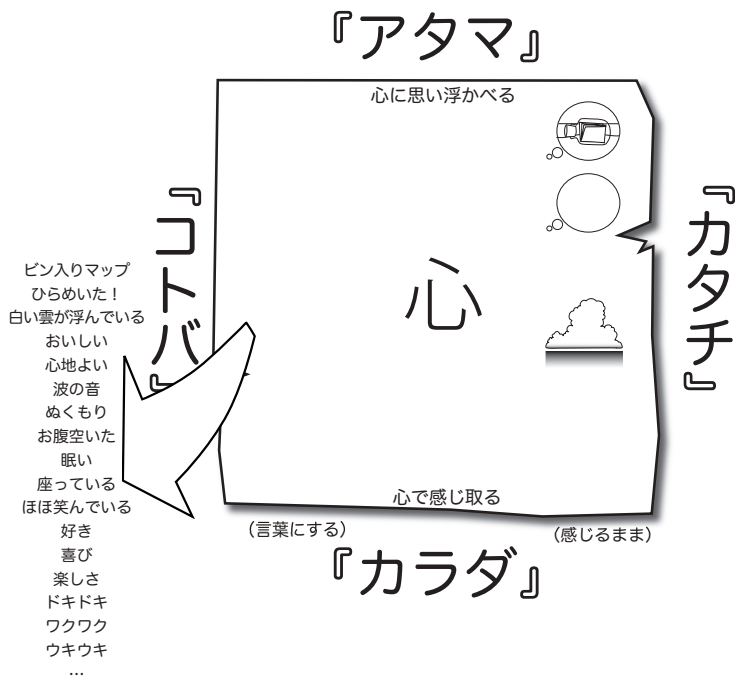
(言葉にする) (感じるまま)

そうすると、心の意味は、もっと広がることになる。

想像やひらめきなどの『アタマ』の方向の心が『カタチ』の方向と『コトバ』の方向に意味が広がるように——

視^し覚^{かく}、聴^{ちよう}覚^{かく}、触^{しよく}覚^{かく}、味^み覚^{かく}、嗅^{きゆう}覚^{かく}、内^{ない}蔵^{ぞう}感^{かん}覚^{かく}、運^{うん}動^{どう}感^{かん}覚^{かく}… などの感^{かん}覚^{かく}や、喜^{よろ}び、楽^{たの}しみ、ワクワク、ウキウキ、ドキドキ、好^すき、悲^{かな}しみ、クヨクヨ、ムカムカ、モンモン… などの感^{かんじよう}情^{じよう}といった『カラダ』の方向^{ほうこう}の心^{こころ}も、『コトバ』の方向^{ほうこう}と『カタチ』の方向^{ほうこう}に意味^いが広^{ひろ}がるのさ。

つまり、まとめれば、次のようになる」



「ほういほういほうい〜♪」

「——」・・・「——あ、やっぱり、お腹空いたなあ。家^{いえ}に帰^{かえ}て何^{なに}か食^たべよう」

27

冷蔵庫の中で冷えていたジューシーな、ももを1つ食べ終えて満足した僕は、ベッドの上で横になると、ぼんやりと天井を眺めた。

——ああ、なんだか眠たいよ。

——少し眠ろう。

まぶたを閉じた。

・・・ ——あっ、またまた、ひらめいた！？

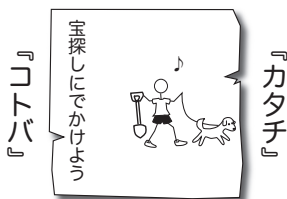
まぶたを開いた。

“眠ろう、何かを食べよう、宝探しにでかけよう…”のように言葉にするだけで、まだ実現していない言葉のままのライフは、『コトバ』の方向にある。

それに対して、『カタチ』の方向にあるライフは——

・・・ ——そうだよ！

実際に眠るとか、実際に何かを食べるとか、実際に宝探しに出かけるとか… うん。つまり、形にするライフが『カタチ』の方向にあるんだ！



(言葉のまま) (形にする)

28

うみ べ
海辺では――

こと ば
言葉にするライフが『コトバ』の方向にあるとすれば、形のまま
のライフが『カタチ』の方向にあるってことを考えた。



いっばう いえ かえ
一方、家に帰ってからは――

こと ば
言葉のままのライフが『コトバ』の方向にあるとすれば、形に
するライフが『カタチ』の方向にあるってことを考えたんだ。



――ライフって、何？

“ライフは宝探した。ライフは航海だ。

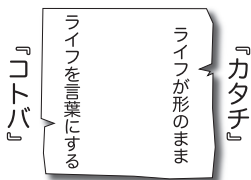
ライフはスポーツだ。ライフは音楽だ。

ライフは演劇だ。ライフはフルーツ育てた。

...”

いろいろある――。

うん。ライフを^{ことば}言葉にするライフが『コトバ』の方向にあるとすれば、ライフが^{かたち}形のままライフは『カタチ』の方向にあるだろう。



——どんなライフにしよう？

“^{たの}楽しいライフにしよう。ワクワクするライフにしよう。

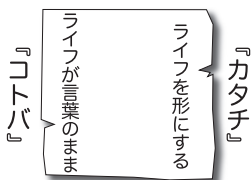
あったかいライフにしよう。^{いろど}彩り^{ゆた}豊かなライフにしよう。

^{ここち}心地いいライフにしよう。フルーツフルなライフにしよう。

...”

いろいろある——。

うん。ライフが^{ことば}言葉のままライフが『コトバ』の方向にあるとすれば、ライフを^{かたち}形にするライフは『カタチ』の方向にあるだろう。



29

まもなく夏^{なつ}が終わり、それから秋^{あき}が過ぎ、さらに冬^{ふゆ}が過ぎると、
雪^{ゆき}解^どけの季節^{きせつ}になった。

音楽イン ♪春 Spring

春^{はる}の陽射^{ひざ}しが、冬^{ふゆ}の間に野原^{あいだ}に降り積^のもった雪^ふを片隅^つに追^{ゆき}いやり、
小空^{こそら}花^{はな}が可憐^{かわれん}に咲^さき始^{はじ}めていた。

新鮮^{しんせん}な雪解^{ゆきど}け水^{みず}によって、小川^{おがわ}の勢^{いきお}いがいくらか増^ましていた。

花^{はな}の咲^さき始^{はじ}めた木^きの枝^{えだ}では、小鳥^{ことり}たちが明^{あか}るい歌^{うた}を奏^{かな}で始^{はじ}めていた。

...

ところが、そのような心浮^{こころう}き立^たつ季節^{きせつ}に、地図^{ちず}の裏^{うら}に書き入^かれて
いた文字^{もじ}やコンパス^{コンパス}の針^{はり}の絵^えは、いつの間^まにか、すっかり消^きえ、コ
ンパースと全^{まった}く話^{はな}せなくなっていた。

——ああ、あいさつできなかったなあ。

なんだかさびしいや。

鉛筆^{えんぴつ}を取^とった僕^{ぼく}は、再び^{ふたたび}『カラダ アタマ カタチ コトバ』を
書^かき込^こもうとした。 ——が、やめた。

これは、きっと、新^{あた}しい第2^{だい}フレームをおじいちゃん^{おし}に教^{おし}えて
もらうべきだってことなのだろう。

そう思^{おも}ったからだ。

それに、自分^{じぶん}で見^みつけたプチ・マップ^{プチ マップ}の作^{つく}り方^{かた}をおじいさん^{おじいさん}に
披^ひ露^{ろう}して、彼^{かれ}をアツと驚^{おどろ}かせたかったし——

結^{けつきよく}局^き、決^きめたんだ。

——おじいちゃんに、また会^いに行^いこう。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

30

音楽イン ♪夏 Summer

ランプベリーを連れて岬へ向かって出発したのは、すがすがしい
 青天が広がる、初夏らしい日だった。

今回は、少し荷物があつたけれど、ペース配分をうまく考えなが
 ら坂を上っていたので、余裕があつた。

途中、周囲をよく見渡すと、樹々が豊かに生い茂っているのがわ
 かった。逆光の中、あわく透けて見える木の葉たちの明るい緑が、
 そよ風によって、さやさやとゆらいでいた。

日光で透けた葉っぱって、こんなふうに見えるんだ——。

ふと、荷物を持つ手を替えた。

坂を上りきると、例の、なだらかな下り勾配を見おろした。

その一面には、若草が生い茂っていて—— 白や黄やピンクの花
 々が咲き、モンシロチョウが何匹も舞っていた。

——アレ？ こんなに、きれいなところだったっけ？

その先に視線を向けると、例の場所に、例のキラリが見えた。

「おっ、いるいる。よし——」 ランプベリーのリードをはずした。

「行け、ランプベリー！」 ランプベリーは、勢いよく坂を下ると、
 しつぽを振りながら、おじいさんにじゃれつき、——やっぱり頭
 をペロペロとなめた。

「アッハッハッ！ くすぐったい。こら、やめろ！ アッハッハッ！」

「おーい！ 元気に生き～ているかあ～い！？ ♪」 僕が近づきな
 がら呼びかけると——

「おう！ げんきに生き〜とるともお〜！♪」 おじいさんは応えた。

音楽 ♪夏 Summer 31 に続く

31

ゆっくりと起き上がったおじいさんの表情は、やわらかかった。

「おう、よう来た！」とおじいさん。

「おう、よう来たぞ！ おお、相変わらず輝いているねえ。カッコいい！」思わず、背伸びしながらおじいさんの頭の輝きを手でふれてみた。

「じゃろじゃろ？ こいつは、わが自慢の存在証明じゃ。アッハッハッ！」

「アハハッ！」一緒に笑った僕は、袋をおじいさんに差し出しながら言った。「これ—— おみやげ」

「お？ なんじゃ？」おじいさんは、そう尋ねた。

「——トマトだよ。親たちが趣味でやっている家庭菜園で採れたんだ。持って行ってあげなさいって——」

袋の中をのぞき込むおじいさん。「おお、新鮮で立派なトマトじゃ。——ありがとうございます。親御さんたちは、トマト作りの名人じゃのお」そう言いながら、うれしそうに袋を受けとるおじいさん。

「——ところで、この袋もなかなか立派じゃのお。あとで返そう」

「え？ ——いいよ、いいよ。どうせ、なんかの使い古しだし」

「いやいや、そうはいかん。長持ちする、よい買い物袋などにも使えそうじゃよ。」

わしが持^もっておつても、宝^{たから}の持^もち腐^{くさ}れになるだけじゃ」

「——」・・・「——うん。わかった。

——アハッ！ “リリサイクル”だね？ あっ、“リリユース”？」

「——あつと、たつた今^{いま}氣づいたんじゃが、ほれ、ここに、ちゃんと名^な前^{まえ}も書^かいておる。アッハッハッ！」

「アハハッ！ 僕^{ぼく}も今^{いま}初^{はじ}めて氣づいたよ」

結局^{けつぎよく}、おじいさんは、その言^{こと}葉^はどおり、のちに、わざわざ、いつたん帰^き宅^{たく}してから、その袋^{ふくろ}を返^{かえ}してくれたんだ。

新^{しん}鮮^{せん}ないちごと両^{りやう}親^{しん}へのお礼^{れい}の手紙^{てがみ}を添^そえて——。

音楽 ♪夏 Summer 32 に続く

32

おじいさんとランプベリーと僕は、水^{すい}平^{へい}線^{せん}を遠^{とお}くに眺^{なが}めつつ、
並^{なら}んで腰^{こし}を下^おろしていた。沖^{おき}合^あいで、1 艘^{そう}の船^{ふね}が、ゆっくり移動^{いどう}
しているのが見^みえた。

「この1 年^{ねん}どうじゃった？ 元^{げん}氣^きにしておったか？」とおじいさん。

「ああ、元^{げん}氣^き！ 元^{げん}氣^き！ ——おじいちゃんの方^{ほう}は？」

「ああ、こつちも元^{げん}氣^きじゃった——」

それから僕^{ぼく}は、第^{だい}1 フレーム『カタチ コトバ カラダ アタマ』
を通^{つう}じて、この1 年^{ねん}で考^{かんが}えたこと、感^{かん}じたこと、や^やったことを、い
ろいろ語^{かた}って聞^きかせた。

“エヘン、どうだ、まいったか！”とでも言^いいたげに——。

「おお、なかなかやるのお。さすがじゃ」 ^{かんしん} 感心するおじいさん。

「さすがじゃろ？ ちょろいもんよ」

「うむ。少年^{しょうねん}よ—— そうやって完成^{かんせい}したプチ・マップたちは、かけがえのない、今^{いま}のおまえさんのものじゃ」

「——。 ——え？ どういうこと？」

「これからの、おまえさんの成長^{せいちょう}や変化^{へんか}に応じて、フレームの活用^{かつよう}法^{ほう}や完成^{かんせい}するプチ・マップが成熟^{せいじゅく}しうるということじゃよ」

「——うん」

音楽 ♪夏 Summer 33 に続く

^{せいちょう} 成長^{へんか}や変化^{おう}に応じて

^{かつようほう} フレームの活用^{ほう}法^{ほう}や

^{かんせい} 完成^{かんせい}するプチ・マップが

^{せいじゅく} 成熟^{せいじゅく}しうる

33

ランプベリーは、そばで^{ひるね}昼寝^{はじ}を始めていた。

「ライフが^か変わる^{こと}—— それ^{じたい}自体は、決して^{けっ}恥ずかしい^はこと
じゃない。それは、ある^い意味^み、生きて^いいる^{あかし}証^しの1つなのじゃから
のお」

「生きて^いいるアカシ——」

そのときは、その^{ことば}言葉^いの意味^みが、さっぱりわからなかった。

「——それじゃあ、^{いま}今^{しやうらい}のおじいちゃんにとっての^{かつようほう}フレーム^のの活用^{ほう}法
とか、^{つく}プチ・マップ^{かた}の作り^は方は？ こう、^{とし}年^{こう}の効^{こう}って^{ねんぱい}いうか、^{ねんぱい}年配^{しや}者^{しや}ならでは^はって^{いうか}、——^{しやういうの}そういうの？」

「ん？ そいつは、おまえさんの^{しやうらい}将来^のの“あ^{たの}とお^{たの}楽^{たの}しみ”という
のが1番^{ばん}よいように^{おも}思う^んじゃが、——^{どう}どう^{じや}じやろう？」

「——。あ^{たの}とお^{たの}楽^{たの}しみ——」

「そう^{じや}じやとも。——^{うむ}うむ。では、そろそろ^{だい}第2^{しょうかい}フレーム^をを^{しょうかい}紹介^{しよう}しようかの」

「よっ、^{まち}待^{まち}って^{ました}ました！」

「^{れい}例^{ちず}の^も地図^も図^もを持^もって^{きた}きたかな？」

「ああ、もちろん」 おじいさんに^{ちず}地図^をを^て手^{わた}渡^{した}した。

「——あっ！ ^{おも}思^だい^だ出^だした！」

「ん？ ^{なに}何^をを^{じや}じゃ？」

「あれ、ほれ、それ、^{ちず}地図^がが、^{だい}第1^うフレーム^{から}から^う生^うまれ^たたペーパー・
コンパスが、——^{しやべ}しゃべ^{った}った」

「アッハッハッ！ そりゃあ、ラッキーでありがたいことじゃ。
よかった、よかった——」満足^{まんぞく}そうな笑^えみを浮^うかべながら、話^{はな}す
おじいさん。

そう言^いわれてみれば、何^{なん}となく、そう思^{おも}えてきた。

おじいさんは、地^ち図^ずをゆっくりと裏^{うらがえ}返した。

「うむ、では、行^いくぞ？ 第2^{だい}フレーム——」

「ああ、さあ来^こい！」

音楽終了 ♪夏 Summer

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For Life

となりのコンパス①

第1フレーム

『カタチ コトバ カラダ アタマ』

【完】